

万軍の神、主にある共同の礼拝を慕い求める

詩編 42 と 43 に似ているこの詩を読んで心に響いたのは、私はこれほどまで、「共同の主日礼拝」を恋焦がれるように求めているか、ということである。そして、浮かんできた讚美歌は、540「わが魂の慕いまつるイエス君の麗しさよ」と622「慕いまつる主のみ招きある今」である。両方ともいわゆる福音唱歌であり、信仰者の、主イエスとの「個人的」関係なのである。「わたしの魂」が神を慕うこと、それを悪いとは言わないが、共に教会堂に集まり、共に礼拝する嬉しさ（時間と空間の中にいる人間の共なる集中）を歌う讚美歌がほとんどないに等しいことは私たちの信仰の問題性を露呈していないだろうか？

1. 万軍の主、あなたのいますところは/どれほど愛されていることでしょうか。

初行の「あなたのいますところは」は「あなたの天幕・幕屋」という意味。この初行に、「主の庭を慕って、わたしの魂は絶え入りそうです。命の神に向かって、わたしの身も心も叫びます。」と続く。まあ、あえて「幕屋」（信仰の民と共に移動する！）という表現が用いられてはいる。コロナウイルス感染拡大下また超高齢化に直面して、主日礼拝のある種の「移動性」が要求されているのだろうか。また、エルサレム神殿中心主義の問題性（地方聖所への圧迫）はあるにせよ、そして、神殿に仕えるコラの子の歌であることを割り引いても、エルサレム神殿への深い思い入れに、わたしたちの個人主義的信仰の問題を考えてしまう。現実問題としてオンラインによる礼拝は、単なる礼拝の消費ではなく、その共同性はどのように担保されるのだろうか？ 私（たち）の信仰の他者性のなさというか、他者を考えると途端に心が重くなる実際である。今日、神はどこにおられるのだろうか？ 「慕う」（英語で恐縮であるが、long というと「長い」という訳語を思うが、long は「首を長くして、思い焦がれ、熱望して、十分待つこと」を意味する。）「魂」だけが主を求めるのではなく、わたしの「心も身も」である。

2. 神殿の燕の巣:神殿にいることの幸い

かつて駅舎や学校に燕の巣があったことを思い起こす。あの燕たちは今どこにいるのだろうか？あまり見かけなくなった。気候変動で日本には住めなくなったのか、あるいは、世界的に燕の数が減っているのか？ ともかく、エルサレム神殿の聖域（「祭壇」にさえ）には、鳥（すずめ）が棲み処（家）を作り、燕が巣でヒナを育てている。彼らさえ、いや神の被造物である彼らこそ、主の神殿を故郷と思い、巣を造るとすると、私たちがな

お更、エルサレム神殿に住み、また、主を賛美できることの幸いを願うと詩人は謳う。

3. 「いかに幸いなことか」

例の「いかに幸いなことか」が5節、6節、12節に繰り返されている。最初は、「主の神殿に住むこと」であるが、第二は、「心に広い道を見ている人は」と言う。最終行では、「神に（あなたに）信頼している人」である。「心に広い道を見ている人は」はヘブライ語直訳では、「その力が神にあるその人、その巡礼においてその心をあなたに（神に）向けている人」のことである。「広い道」とはシオンの山、エルサレムに向かう巡礼路であろう。実際に「広い道」であったのだろうか？7節は巡礼の道における様々な困難に言及しているのであろう。

4. 「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです」（11節）

この表現も神礼拝者の喜び、誉れを表現する印象的なものであろう。一日千秋の思い？主にあっては、「主のもとでは、一日は千年のようであり、千年は一日のようです」（IIペトロ 3:8 という表現を思い出させる。流れていく時間の中で神を想う瞬時、機会を捉える重要性。「もう遅すぎる」「まだ時がある」とは言わず、「その日の苦労は、その日だけで十分である。」（マタイ 6:34）の理解の仕方を黙想しよう。

5. 主よ、わたしの祈りを聞いて下さい（9-10節）メシアへの願い

神の神殿での共同の礼拝の喜び、エルサレムへの巡礼の道における護りへの願いの中に突然のように、9-10節が挟まっている。「万軍の神、主よ、わたしの祈りを聞いて下さい。ヤコブの神よ、耳を傾けてください。神よ、わたしたちが盾とする人をご覧になり/あなたが油注がれた人を顧みて下さい。突然、「わたしと—あなた」の神と人の対話的歌に「わたし」と「わたしたち」そして神が「油注がれた人」が登場してくる。ここではイスラエルの王を意味しているのであろうが、キリスト者は到来しつつある「メシア・キリスト」イエスを展望する。

6. 主は「太陽」（12節）

基本的には太陽神であるエジプト（日本も）に対抗して神を「太陽」と表現するのはここだけである。しかし、「義の太陽は射し出でぬ」の讚美歌（教団賛美歌 345）は大切に、力強い。「恵み」と「栄光」と共に「日輪」である神を黙想しよう。そこから「恵み」「栄光」「光」「暖かさ」「命」そして「義」が射しこんでくる。アッシジのフランシスコの「太陽の賛歌」も思い起こされる。主はいのちの源であると共にいのちの護り手、いのちの「盾」である。